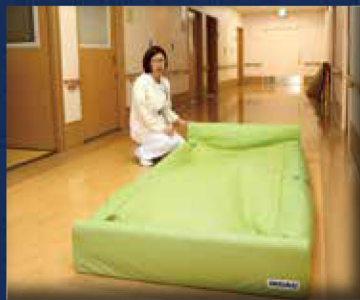
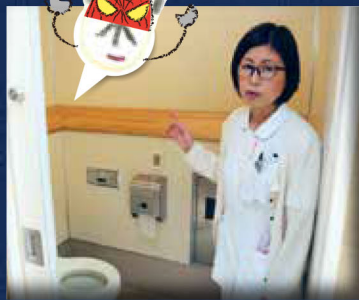




立て掛けられない舟形ベッド



病室の内扉は開けたら壁にロックする



鋭角の手すりで登りにくいトイレ

「ほかに工夫されている点はありませんか？」
「何かに追われているといった妄想に捉われて
いる患者さんは、とにかく逃げなくちゃ！」と
焦燥に駆られて、部屋の上へ上へと登ろうと
されるんです。それで怪我をする危険性を減
らすため、たとえばトイレの手すりも床と並
行ではなく、足をかけにくいよう鋭角になっ
ています。容易には登れないよう設計してあ
るんです」

それでも体
力のある患者
さんは、トイレ
の壁をスパイ
ダーマンのよ
うに登ってし
まわれるとの
ことで、病気の
力がいかに大
きいかを実感
させられる。
「病室には外
扉と内扉があ
るんですけど
内扉を開けた
ら必ず壁側に
ロックします。
そうでないと
扉の上部を利
用して、自殺
行為が生じる
おそれがあり
ますから」
「希死念慮（自
殺願望）が強
い患者さんの
場合には、こ
の部屋に置い
てある低床ベ
ッドよりもさ
らに安全性の
高い、全体が

柔らかいクッションで作られた舟型ベッドを
使います。硬いベッドだと壁に立て掛けて、そ
れが自殺行為につながる可能性があるんです」
患者さんの希死念慮というのはこれほどま
でに凄まじくだからこそ細心の注意が必要
なのだ。そして、どのような形であれ患者さん
の命を失いたくないという、スタッフとしての
断固たる決意も伝わってくる。

本当はスタッフもしたくない身体拘束

「お訊きしにくい部分かもしれませんが、
身体拘束が必要な患者さんもいらっしゃる
んですか？」

「身体拘束を要する患者さんも一割程度お
られます。ご存じとは思いますが、拘束は決して安
易に行うものではなく、ご自身もしくは他人
を傷つける可能性が高い患者さんに対して、
精神保健指定医の指示によって必要な時期だ
け行う医療処置です」

そのうえで声を抑えながら中村さんは続け
られた。

「拘束を行わざるを得ないとき、患者さんご
自身がつらいのはもちろん、ご家族さん達も
葛藤されます。患者さんが言葉で諭しても自
制できない状態にあることは、それまで不眠
不休で対応してこられた家族の方々も痛いほ
ど分かっていらっしゃるんです。それでも拘束以
外の方法で何とかならないかとおっしゃる場
合もあり、ご納得いただけるまで拘束の必要
性を説明します」

身体を拘束する必要があることを頭では
理解していても、いざ行うとなると葛藤され
るご家族の気持ちもまた当然だろう。
「それに、拘束を行うと私たちスタッフも大変
なんです。心情的にもつらいですし、身体面の
管理にも非常に気をつかいますから」

身体面の管理、ですか？

「食事や排泄の管理はもちろん、深部静脈血
栓による肺塞栓症を防ぐために弾性ストッキ
ングで下肢の鬱血を予防したり、神経障害や

循環障害のリスクを考慮してマッサージや導
尿を行ったり…。これらは一例にすぎません」
拘束するとこれほどと身体管理に気をつかう
とは知らなかった。

大変なこと、印象に残っていること

「お仕事のうえで大変なことも多いんじや
ないでしょうか？」

「大暴れしながら入院されるケースもありま
す。とくに大変なのは脱法ハーブ（＝危険ドラ
ッグ）の離脱症状の患者さんですね。深刻なせ
ん妄状態、例えるなら逃げようとしても足が
一向に進まない悪夢の中でもがき続けている
ような状態だから、こちらの説明がまったく
入らないんです。おまけに脱法ハーブの患者
さんって力の強い若い男性が多いから、男性
看護師4～5人がかりでなんとか抑え込んだ
こともあります」

それだけでなく多くのスタッフが要されるくらい
の修羅場なのか……。

「大勢のスタッフで対応することで、患者さん
がよい意味で『あきらめて』くださることも多
いんです。こりゃあ抵抗しても無駄だ……。と。
取っ組み合いになって双方が怪我するよりは
お互いにとって利益だと思っています。患者さ
んから『あんたらズルいわ』と苦笑されること
もありますけどね」

印象に残っているエピソードはありますか？

「これも脱法ハーブの患者さんで、警察経由の
搬送で来られたケースがあったんですが、入
院時に所持品をチェックしていた看護師がな
にか引っかけたらしいんです。その患者さん
が上着の裾を始終気にしていて、どうも様子
がおかしいと。それで詳しく調べてみると、裾
の縫い目にドラッグのパケが仕込まれていた
ことがありました。現場看護師の長年の勘っ

てやっぱ入りこいと感心しましたね（笑）
警察も気づかなかった仕込みを発見する看
護師さん、たしかにスゴすぎである。

お仕事への想い

「さいごに、お仕事への想いなどありまし
たら聞かせてください。」

「なんと言っても嬉しいのは、患者さん達の目
を見張るような回復ぶりですね。しつちやめ
っちゃかの混乱状態で搬送されてきた患者
さんが、一週間後には別人のようにシャーン！
としておられて、本当に別の患者さんだと
勘違いしてしまったことも何度かあるんです
（笑）。患者さん本来の姿を見られる喜びと
私たちの医療がそれに大きく貢献できる喜び
と、両方の意味で嬉しいですね」

こんな中村さんの言葉からは、症状と患者
さん自身とを常に分けて考え、症状を病気に
よる現象と捉えて向き合う姿勢が一貫して伝
わってくる。

精神科救急病棟は決して監獄のような場
所ではなく、スタッフ一同が患者さんの回復を
願って奮闘している現場だった。このことを
我が身で感じられた今回の取材は、筆者にと
って大きな財産になりそうだ。

（取材と原稿／臨床心理士・名倉）



取材協力

中村 かおり (なかむら かおり)